

昭和65年3月1日第3種郵便物認可
平成13年8月1日発行第141号
俳句雑誌 沖 第24巻第8号

俳句雑誌「おき」



8月号

沖
発行所

天の洗礼

林 翔

創刊直前の頃

早瀬波句碑除幕 三句

わが句碑に天の洗礼若葉雨

梅雨濡れの句碑守り呉れよ松大樹

青梅雨に洗はれし句碑何時また見む

秋保温泉一句

湯浴みする吾をじつと見る白躑躅

「沖」創刊号は昭和45年10月号であるが、その直前、45年8月号・9月号の「馬酔木」に登四郎氏がどんな句を出していたかと調べてみた。8月号は「一隅」と題する10句で

青梅雨の家透くまでを降りやまず
単衣着て帯緊めすこし隙つくる
椎の香のよどみに醒む浅ねむり
全き虹見てゐるくらき一隅から

等である。「醒む」は「めざむ」とここでは読ませるのだろう。

9月号は「夏樹」と題する10句。

をさな児の眼にはじめての虹教ふ
樹脂ゆたかなる夏樹を愛す古青年
何のうれしさ蝸牛の渦を数へをり
梅雨雲を抜けられぬ鳥椏にゐる

等であるが、問題は「古青年」という造語であろう。当時作者は59歳。

梅雨なりや梅雨晴なりや空白き

咲かむとし咲き得ぬ牡丹今日も雨

牡丹蕾ちよろり舌出す明日待てと

風立ちぬ老樹の嫩葉大揺れに

黒薔薇妖しき香りもてひらく

昼顔よ道に迷ひし吾を笑へ

心は青年なのだが選歴に近いのだ。樹脂ゆたかな夏の樹木を愛する心は青年、しかし肉体はとうとうジレンマが生み出した造語なのであった。この頃の句は『民話』（第四句集）に収められているが、「古青年」の句は載っていない。

右に挙げた8句の中で私が一番好きなのは蝸牛の句、『民話』では、「数へをり」が「かぞへをり」と書き替えられていた。

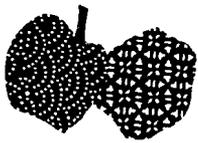
このころ私はどんな句を作っていたかと思たら、

句集「和紙」脱稿

藻の花よ生れし水泡を惹しめ

があった。第一句集『和紙』出版の直前なのであった。

林
翔



翠 蔭

能村 研三

岳父の死

七月に入つて間もなく、やっと時間がとれたので、妻と次女、義母と連れ立つて安房鴨川に入院している岳父を見舞つた。

四月に私が職場が変わつたこと、妻の入院など落ち着かない日々が続いたので、三カ月ぶりの見舞いであつた。鴨川までは市川から百二十キロ位あるので簡単に行き来できる所ではなかつたが、一部高速道路も整備されたので、以前ほど時間がかからなくなつた。

見舞いに行つた七月一日から病状が思わしくなくなつた。医師の話では急変する心配は無いとの事で、一応帰宅したのだが、四日になつて病院より連絡が入り危篤状態に陥つた。家族と共に再び病院に駆けつけたが、幸いこの日は小康を得た。病弱な義母が看取ることは無理なので、この日から何日間か妻と娘が病院の近くに泊まつて看病することにした。

その後病状が落着いたので、疲労が見え始めた妻と娘を一旦市川に戻らせ、私の休みを利用して一緒に行くことにしていた。ところが十四日の未明、病院から亡くなつたとの知らせを受けた。

岳父は、戦争中、中国本土の実戦

冷夏てふ淋しさををり夜の海

透かしては濁りの足らぬ梅酒瓶

節くれの掌に安らげる螢の火

入院中の岳父急変

半夏雨や呆けし父に言もなし

梅雨幾日看取り尽しの妻なりし

小康を得て花合歓の咲きつづけ

死が徐々に睡りに降りて涼気かな

七月十五日永眠

夏暁に屍がもどる浦伝ひ

納棺はいつもの父の端居処

翠蔭にさしかかりたる葬車列

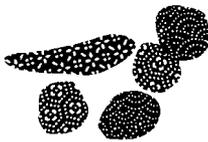
にも参加したという。戦後は電力会社にも勤めよい家庭を築いた。後年、私たち夫婦が子育てや病弱な両親を抱え、さらには沖の発行事務もこなさなければならなかったことから、近くに居た岳父は毎日私の家に来ては、子供の面倒を見ながら句集の発送などを手伝ってくれた。とても誠実な人で、父登四郎とも気さくに声を掛け合っていた。

葬儀の日、子供が小さな時に祖父と撮った写真をアルバムから持ってきたが、孫の世話をしている岳父の顔は穏やかそのもので、多忙な私たちを助けることに生き甲斐を感じているようであった。

晩年は空気の良い九十九里の近くで余生を送っていたが穏やかな八十四年の人生であったように思う。

合掌

能村研三



蒼茫集

句碑開眼

遠藤 真砂明

快雨かな緑しぶきに那須郡
青葉して句碑開眼の男降り
国原を早瀬つらぬく新樹光
青芝を刈りしばかりの通り雨
祝事の明日へ岬の星涼し
纜をくぐり夜明けの夏燕

万緑の芯

松井のぶ

据えられて万緑の芯となりし句碑
句碑除幕緑雨の中に生るるなり
曲家のくらし涼しさ後にせり
父の日や父も子もなき夫とをり
人間へ色めきだちぬ黴の花
パリ発の塩とどきけり栃の花

旅 寝

辻 美奈子

産み待ちは旅寝のごとし梅雨の月
白玉の白を汚さず食うべけり

翼なけれど裸子を抱く双手
球形はずしき形身ごもれる
胎内にまだ居て欲しき子よ夕焼
山滴る金剛石は青を帯び

みどり

長谷川 鉄夫

三百十二年前のこの日の緑雨なり
万緑は一大円周句碑生るる
ころころと実梅寄り添ふ句碑の影
墨彩の青嶺を雨が描きをり
はなむけの緑雨の静寂句碑生る
草笛上手とは唇の反り加減

男の音

原 教正

麦秋に老い 観光馬 優しき目
麦秋や手を当て 火照る馬の胴
瓜きざむ 男の音は つながらぬ
燕に軒貸してより 日々新しき
ひらく書にいつ 挟まりしが がんばか
びヤホールをみなら 強き世なりけり



潮鳴集



師 弟

秋葉雅治

連れ舞や触れて師弟の衣すずし
あす勢ふ形に干され祭足袋
碑に刻みこころに彫りて那須万緑
父の日や拳のぬくみいまにして
聴診もせで夏風邪とのたまへる

快 老

鈴木 夫佐子

暮春なり露むく指のむらさきも
遥かなる海見る薔薇に疲れし目
つくづくと快老けさの新茶滝れ
あぢさゐに惻惻遠し母との日
初蛙終りはくくと鳴き足して

高しぶき

岡崎 伸

滝仰ぎふつふつと身に渡るもの
今生れし句碑にみそぎの走り梅雨

郭公のこだま四方より尾瀬を行く
陸現れて遠泳のまた高しぶき
手触るれば一尺躍り魚籠の鮎

あぢさゐの風

徳植 よう子

なびくもの着て六月の旅へかな
あぢさゐの風が袂をふくらます
冷房を弱めてはじむ喜寿の宴
憂きみに帰るふるさと青田風
父の日や頬にちくりとばらの棘

土 管

田辺博充

かく更けて平家螢の草書翔び
夏草や休んでゆけと土管あり
冷し麦喉の早瀬をくだりけり
名水とや緋の病葉のしづみたる
墓に詫び卯の花のよく散るゆふべ

沖作品



能村研三選

千葉

安藤しおん

対角線きめて端午のかぶと折る
麦の穂に遡上のやうな風渡る
塵勞を脱ぐきつかけの更衣
日を食みし熟麦風を甘くせり
白日傘背中に風の余白かな
湖の雨つれて鮎鮎とどきけり
老ゆるまじ瀧のマイナスイオン浴ぶ

谷口みちる

夕風や船笛重くただよへり
溪深し慈悲心鳥のビブラート
朝涼やフランスの水注ぎ分けて
花は葉に帯の真赤な新刊書

長野

高橋あゆみ

燕の子口あく度に数違ふ
胎教といふヴァルディ若葉風
御柱に今斧入る青嵐
ことばつしむ万緑のなかにぬて
棕櫚咲くやイスラム文化蝕みて

東京

福嶋千代子

長野

矢崎すみ子

茨城

今瀬 一博

山梨

長岡 新一

新潟

長谷川 春

魚のわたするりと八十八夜寒
業平忌脱ぎてはかるき蛇の衣
青梅や少年僧の声を張り
万緑の一色に杼の走りけり
花びらの帆を揚げてゐる蟻一匹
日時計の針光りたり麦の秋
牧開く五月の水を奔らせて
風を知る丈となりけり今年竹
言ひ付けに来る子いとしゃ夏薊
新茶汲む身内に霧のけぶりをり
片陰や千年杉の力瘤
十二時のチャイム緑に飴する
ひんやりとライトアップの青葉かな
六月の風六月の皮膚呼吸
陳列のすずしき漆面かな
ためいきも言の葉のうち下萌ゆる

お中日の朝のオムレッツ花菜いろ
散り敷いて人魚の鱗花吹雪
登校を拒む児を訪ふ蝶の屋
鉢巻の大工まだをり五月闇
牡丹の一風をもて崩れ初む
まつさらな脳になりをり青あらし
虎が雨霊山しじま深くして
山青葉古寺の藁も染めにけり
みちのくは水のおかるき植田風
湯の町は山より暮れて灯の涼し
麦笛を吹いて遠き日巻き戻す
地球儀に赤き島あり子供の日
朴の香の沁みるまで肺膨らます
人目にはつかぬ所の母子草
とどまればうなじの青む木下闇
笹粽解きゆくほどに香のゆかし
蛇の衣われには到底脱げぬ殻
周防灘海辺ははやも麦の熟れ
月日みな愉しよく鳴るラムネ玉
がうがうと滝の全長暮れ残る
十一や山の日に干す山のもの
通訳におくれて笑ひさくらんぼ
白牡丹むかし夕べは人を待ち
喃語にはなんごでかへす天瓜粉

岩手

葛西 裕子

新潟

久保田波奈

鹿児島

田淵 葉陽

大分

吉武 千東

東京

坂 ようこ

石川 笙児

杭といふ杭に鵜のゐる潮だまり
短針にわづかな狂ひ青あらし
約束を果せず梅雨に入りにけり
師の句碑をことほぐ青田戦ぎけり
いい人もいい子も嫌ひ桜桃忌
青葉冷壺の碑格子越し
この青嶺越ゆれば夫の任地なり
潔癖の白をとほして朴咲けり
工房にこけし削る音夏来る

岩手

栗城 静子

加藤富美子

新人賞予選句（八月）

対角線きめて端午のかぶと折る
朝涼やフランスの水注ぎ分けて
ことばつつしむ万緑のなかにゐて
棕櫚咲くやイスラム文化蝕みて
万緑の一色に杼の走りけり
風を知る丈となりけり今年竹
ひんやりとライトアップの青葉かな
ためいきも言の葉のうち下萌ゆる
まつさらな脳になりをり青あらし
麦笛を吹いて遠き日巻き戻す

安藤しおん

谷口みちる

高橋あゆみ

福嶋千代子

矢崎すみ子

今瀬 一博

長岡 新一

長谷川 春

葛西 裕子

久保田波奈

沖作品 選後句評

*
能村研三

対角線きめて端午のかぶと折る 安藤しおん

端午の節句は、江戸時代以降男の子の節句として親しまれてきた。武家の家では男の子が誕生すると甲冑や刀など武具や旗幟を飾ったことから、これが庶民の間にも広がった。紙でかぶとを折る折り方もそんなに難しくはなく、新聞紙のような大きな紙で折られることが多い。この句の面白さは「対角線」という幾何学的な用語が用いられていることである。こういった言葉はどちらかと言うと無機質で詩的なイメージが広がりにくいものなのだが、掲句では、それが却って新しい詩的イメージを広げることとなった。幾何学的にも対角線はお互いにものを二分する役割をもっていて、かぶとを折る時の一番最初の動作でもある。この対角線がきつちりと折れば後は全てうまくいくもので、この折り方に作者の思いが伝わってくる。

朝涼やフランスの水注ぎ分けて 谷口みちる

今年には「エヴィアンサミット」の開催で、一躍エヴィアンの名を世界に知らしめたが、ミネラルウォーターで名高いエヴィアン・レ・バンは水と共に歴史を歩んできた。その歴史は古く五万年前にアルプスの高原に降った雨が地に染み込んで自然のフィルターに濾過されるうちに純度の高いミネラルウォーターが出来上がったという。谷口さんの句、句の中ではエヴィアンの水とは具体的に言っていないが、「エヴィアンサミット」でその名が目目されている時期だけにタイミングがよかった。「フランスの水」と言われると、アルプスの風景を目に浮かべいかにもおいしそうに見える。朝涼という季語は日本の四季の微妙な涼さを表した句で、その内容と上手くあっているとおもしろい。

ことばつつしむ万緑のなかにゐて 高橋あゆみ

「万緑」という季語の初出は中村草田男の「万緑の中や吾子の菌生え初むる」の句であることは有名であるが、満目の草木の緑は、夏の大地にみなぎる生命を感じさせる。ハイキングに出かけた時、山々の緑に感激し同行したもの同士会話も弾むものだが、この句はそれを超越し余りにもすばらしい一面の緑に言葉では言い尽せないものがあつたのだ。(以下略)